
信じてるから、疑う

岸川澪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

信じてるから、疑つ

【Zコード】

Z0449Z

【作者名】

岸川澪

【あらすじ】

俺は、工藤新一

今は20歳で、志保と結婚して一年。
最近気になつてゐる事・・・それは・・・

志保が異様な行動をすること・・・
浮氣をしているのかもしね・・・

そう思い調査した・・・結果は・・・?

俺は工藤新一

今は20歳で、18の時組織を潰す事に成功した

そしてその後、志保が自殺しようとしているところを止め告白し、結局生きる道を選んで、俺と付き合ってくれた

一年間付き合い、俺は志保にプロポーズをした

志保は喜んでくれて、それから一年

蘭は快く二人の関係を受け入れてくれて、今は同じ大学の先輩と付き合っている

すべてが何もかもいい方向に進むはずだった・・・が・・・

最近志保の行動に目を光らせていた

新一が仕事で事件の捜査や浮気調査などをしている間断り無く出かけたり、家に誰かが来たようにいつもぐちやぐちやの俺の靴がそろえられていたり、リビングが片付けられていたり・・・

夜帰つても夕飯と置手紙だけだつたり、ちよつと高価そうなネックレスをつけていたり

一番不審なのは、出かけるたびに、結婚指輪をつけず、その代わり俺の前でつけないネックレスをつけていることだ

もしかしたら志保は浮気をしているのではないか・・・?
(特に、異様にべつたりな黒羽とかめっちゃ怪しい)

俺は、誰にも秘密で調査する事になつた・・・

1話（後書き）

リクエスト作品です

多分ひくなものにならないと思します（私のせいで）

失敗

「くそーーー！」

俺はそう叫び、歯軋りをする
調査をはじめてから一週間
一週間だぞ！？

なのに写真の一枚も手に入らない

尾行すれば撒かれるし、志保のジャケットにあらかじめ発信機と盗
聴器つけりゃとつぶされるし

しかもやっと行き先つかんだと思つたら・・・

（空想）

「待ち合わせ・・・か

俺は今日母さんに借りた変装道具で一応変装してゐ

周りを見渡す志保がこっちを見た

俺は急いで手にある携帯をいじるフリをした
一応ばれなかつたらしい・・・

でも・・・
あれ・・・？

新一？

「うげあああああ！」

「何してんの？」

「あ、あ、あ、シーツ」

「ふーん、そつか・

浮氣調査・・ねえ？」

「一応極秘なんで、誰にも言つなよ」「でもさ、その変装はまずいって

だつて私、迷わず新一だとと思ったもん」

（終）

尾行した晩「ストーカーみたいな真似するなら別れるから」なんて
いわれるし！

「いつたいどうすりやいいんだよーーー！」

俺の声は家中に響いた

そうこうえばガキの頃相手にされなくて家に帰つてぐるなり泣き叫んで執筆中の父さんに怒られたっけ・・

「何叫んでんのよ」

「じつ・・志保・・」

「何よ、人を化け物みたいに」

「別にやつしねえナビっ・・・

「ひ、ひつ・・・

「べり行へだ?・

「あ、あ・・・

「ま、今田・・・

「おれたの?・

訪問

「今日は黒羽君が来る日じゃない」

「はあい？」

「だから、迎えにい」「いつと思つて
の人、車ないから」

「あんだと?...」

「なによ」

「あのひ・・それは・・

なんでもないです・・

やばいやばこ・・

志保のこと隠つて黒羽といふんじやないかと思つてゐなんて知られたら離婚させられるぜ・・

「わう・・

じゃあ、行つてくるわ

「行つてらつしゃこ・・

つてこいのかよ?...」

ひとつ車に「アイツと志保が乗るんだぜ？！」

黒羽だつたら何しでかすかわからねえし・・・

「やっぱ俺も行く！」

「は？」

「何だよその反応」

「別に

あなたが進んで黒羽君を迎えて行く時いつしょに行くなんていわな
いから・・・

「あ、それはつまり・・・お前一人で迎えに行くと何か危ない事にな
るかもしけねえだろ?」

「・・・そうね・・・

行きましょう

「ああ・・・

車に乗り込み、運転席に座った志保の腕の動きを見ていた
しばらくしてついた黒羽の家に志保が入つていって、もう一〇分近
くたつ

「まさかっ・・・

～その日の黒羽家～

「だから、どうして新ちゃんまでつれてきたやつたわけ？」

「仕方ないじゃない、あの人があるついでにいたから」

「だーかーり、どうしてダメっていわなかつたの？」

「だつたらどうひでダメなのって聞かれるでしょー。」

「もうだけど、ほかに元まかしようがあるでしょ？」

「仕方ないでしょ

とにかく行かないと、それこそ疑われるわよ」

（終）

「久しぶりだねー新ちゃん」

「おい、遅すぎるわ

何やつてた」

「あ・・それはね・・」

「私が入つたことに驚いて黒羽君がお皿割つたから、その後始末してたら黒羽君に電話が来て、それが家の電話で、おしゃべりな人だつたからなかなか離れられなかつたのよ」

「ふうん・・」

(もうすぐ志保ちゃん嘘上手・・・)

「車、出すわね」

ギアレバーを力強く引き、ハンドルをきつた

数分たつて付いた二人の家は相変わらず綺麗だった

志保ちゃんのおかげで掃除はちやんとされていて、埃ひとつない

「どういへ」

志保ちゃんがお茶を出してくれた

「あつがとー」

暖かい紅茶は、志保ちゃん特製の味

志保ちゃんはすべてを置くと、キッチンとお盆を片付けてからいつに来た

「黒羽は何で今日來たんだつけ?」

「何でもいいじゃん」

「よくねえよっ!」

田を開いて怒鳴る新ひやんの顔は面白い

その数分後、新ちゃんはすっかり眠ってしまい、俺たちは一入きりの身になつた

「作戦、成功ね」

「だね」

俺たちは地下室に入った

「ちょっと、こんなんじゃ全然ダメよー。
さすがに私でも喜びやしないわよ」

「そうかなあ？」

俺としてはなかなかいいほうだと思つただけど

「あのね、私達は「こんな」とをするためにこの作戦をたてたわけじ
ゃないのよー！」

「いいじやんいいじやん

ほらほら、こんなのはなんてビーツ？」

「なによ・・

れつきのと大して変わんないじゃない

「そうかなあ？」

＊＊

「んん・・・」

田が覚めてみると、そこはソファーのうえ

部屋には誰もいない

あつたはずの紅茶も無ければ、一人の姿も無い

まさか黒羽が志保を襲つたとか？

やべえっ・・・

地下室に下りて、ドアの前まで来てみると、一人の笑いあつ声が聞こえる

勢いよくあけてしまつた

「おひつーーー」

「あら、起きたの？」

「なに、してんだよーーー」

そこには、デスクに向かっている一人、デスクの上には志保のノートパソコンがある

「なにかしらね？」

「なんだろ?ね?」

「人の返答は同じものだった

志保はパソコンをきると、部屋をでた

「で、なんで俺は眠つてたんだ?」

「だから、紅茶飲んであつたまつたからだかなんだか知らないけど、寝ちゃつたのよ

突然、ね?」

「うん

「つくり寝ちゃつたよ」

「なわけねえだろ! ! !

俺は幼稚園児か! !

バカにすんじゃねえぞつ! ! !

「俺、帰るね」

「送る?」

「大丈夫

きっと、誰かさんが付いてくるしや」

「そうね・・・

「誰かつて」隠してゐ事になつてねええええ!

でも・・情報キャッチ

パスワード

黒羽と二人でパソコンを見ていたところはパソコンにヒントがあるんだな？

思つて、地下室に忍び込んだ

今日は志保はいつもどおりどこかに出かけていない
そのうちにパソコンを覗き見て証拠を突きつけてやる
そう思つてパソコンを立ち上げた・・が・・

「パスワードを入力しろだああああああーー？」

そう、電源をつけたら、パスワードを入力しろといつてきた

いろいろ試してみた

志保の誕生日、明美さんの名前、俺の誕生日、俺の名前、結婚記念日、博士の誕生日、APTX4869、sheerry、まさかとは思つたが、志保のフルネームなどなど・・・

どれも間違つていて、データが開く事は無かつた

俺に見られると思つてパスワードかけてやがんだな・・・

そりやそりや

「ノルマ」

「ただいま」

「おかれり・・

そういうえば志保、どうしてパソコンにパスワードかけてあるんだ？」

「何でそれを知つてんのよ」

「いや・・・間違つて電源を・・・」

「は？」

付くわけ無いでしょ

いつもモニター閉めてるから電源ボタンなんて押せないわよ

あなた、覗き見しようとしたわね？」

「ちがうつつーー！」

「ふうん？」

尾行の次は覗き見・・ねえ？

ストーカー以外の何といえばいいのかしら？

「こつちは離婚する気よ」

「お願いしますうううう

それだけはお許しを・・」

「あ、そ

じゃあ答えてあげる

私のパソコンにはAPTXのデータや、その解毒剤、また、組織の

データをバックアップした物だって入ってる

それにはまたパスワードをかけてあるけど

それに、あなたに教えないのは・・

「・・・・・」

「プライバシーのため」

「はあああああああああーーーー！」

プライバシーだあ？

そんなもんのかよーーーー！」

「パスワードを書ける理由なんてそんなもんでしょ」

「じゃあ俺たちの仲は、プライバシーなんかで塞がれちまうような
薄っぺらい仲なのかよ！！」

「何が言いたいのかわからんけど、あなたがそう思つたらううなんぢやないの？」

「はああああつあああああああ……？？」

「あー、つるといわね

耳の聽覚の機能は再開発されないの

1歳の時から100歳まで作り変わらないの……！

聽覚を無駄にしたくないからあつち行つてちょうどいい……！」

「はああああああああああああああああ？？？？」

当然の、」とく、その三十分後、俺の声は枯れ、のども痛かった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0449z/>

信じてるから、疑う

2011年12月16日20時45分発行